

をかけて、一本ばしでするのが、なんとも言えない味わい方でした。ここにはたよ女のあたたかい心が、あらわれています。

たよ女のえらきは年をとつてからも、俳句の心がいつそう清くすみわたりよい俳句をつくつたことです。たよ女の育てた須賀川市内の弟子には、山辺清民せいみんや道山みちざん山などがいて、たよ女の志こころざしをついでもりたてていきました。さらに、たよ女は一生を通じて、松尾芭蕉ばしやうを尊敬そんけいし続けて、その伝統でんとうを残そうと努力しました。

たよ女は、八十才のとき、芭蕉が須賀川を訪れたときにつくつた有名な俳句

「風流のはじめやおくの田たうえ唄うた」という句碑ひを建てました。この句碑は全国にあまりないほどりっぱなもので、須賀川のほこりでもあります。十念寺にあり、今でも訪れる人が絶たえません。

たよ女が七十八才のとき、長男と次男の二人は、年老おいた母をなぐさめようと、須賀川のあたご山やみょうけん山あたりへ花見にさそいました。たよ女は、夕方